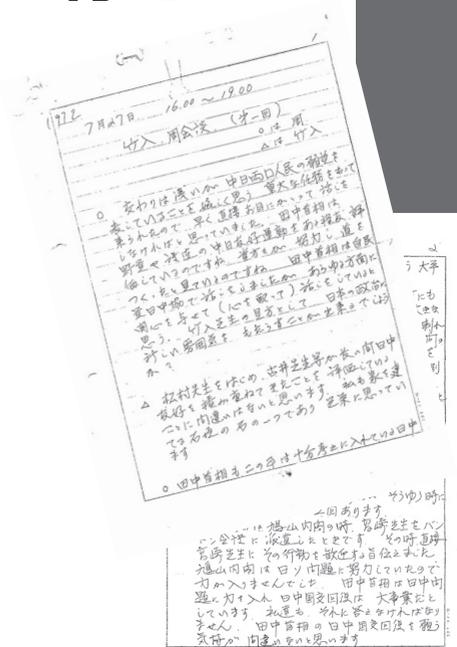


「竹入メモ」 日中国交正常化を進めた 公明党委員長の独断専行

中国側の誤解と、竹入の独断——
二つの偶然が重なって
歴史はうなりを上げて動き始めた。

二〇〇一年四月に情報公開法が施行され、外務省が機密指定を解除した文書のなかに、一九七二年七月の竹入義勝公明党委員長と周恩来総理の三回に及ぶ秘密会談の記録が含まれている。罫線紙で五六枚にわたる手書きの会談記録には、国交正常化に際しての中国側の共同声明案が一字一句正確に示されており、いわゆる「竹入メモ」として、田中首相が訪中を決断する決定的な判断材料となった。



香川大学法学部准教授
井上正也

一九七二年七月七日に田中角栄政権が成立した時、既に日中国交正常化の機は熟していた。前年七月のキッシンジャー訪中による米中接近が展開され、同年一〇月には中国政府の国際連合加盟が実現していた。また財界からも訪中団が相次ぎ、日本国内に「中国ブーム」を巻き起こしていたのである。

日中国交正常化を旗印に自民党内の支持を固めて成立し

た田中政権であったが、表向き姿勢とは裏腹に、田中首相は、早期に国交正常化に向かうことに慎重であった。総裁選で親台湾派に近い福田赳夫に勝利したとはいえ、自民党内には未だに親台湾派の影響力が強く、日中関係をめぐる軽率な動きは政権基盤を弱体化させる懸念があったためである。

一方、日本の動きとは対照的に、周恩来は、悪化する中ソ対立への懸念もあり、日本の政権交代を機に一気呵成に国交正常化を実現する狙いがあった。そして、国交正常化交渉に向けて、日中両政府の橋渡し役として白羽の矢を立てられたのが公明党だったのである。

中国側が、なぜ公明党に着目したのかは今なお不明な点が多い。公明党は、前年六月に竹入を団長とする訪中団を派遣し、後に日中国交正常化交渉の焦点となる「復交三原則」（当初は「復交五原則」）を発表するなど、日中関係打開に向けて積極的な野党外交を展開していた。また、党内で深刻な派閥対立を抱える自民党や社会党よりも、秘密保持の点で公明党の方が好ましかったためかもしれない。いずれにせよ、中国の招請を受けた竹入ら党代表団は、七月二五日に羽田を出発し、香港経由で通常三日かかる行程を、中国側が特別に用意した列車と航空機を乗り継いで、その

日の内に北京入りしたのである。

異例ともいえる中国側の接遇の背景には、竹入が田中の命を受け、国交正常化の具体案を持参して来るという誤解があった。実際、張香山外交部顧問は、後年、「田中総理は竹入委員長を『和製キツシンジャー』に選んで中国と交渉し、双方の意見を伝達することにした」と述べている（NHK取材班『周恩来の決断』NHK出版、一九九三年）。

竹入の独断

しかし、実態は「和製キツシンジャー」とは程遠いものであった。出発前に竹入は田中や大平外相に面会して、国交正常化の方針や条件について尋ねた。だが、二人とも明確な回答を避け、竹入は有益な情報を引き出せなかった。田中は「日中に手を着いたら台湾派の抵抗は強く、田中内閣は吹き飛んでしまう。俺は日中を考える余裕もないし、今はやる気がない」と後ろ向きの姿勢を見せ、竹入が周恩来宛の一筆を求めても、「代理と受け止められる」と拒絶したという。この時点で、田中は竹入を橋渡し役と見なしていなかったのである。他方、公明党の支持母体である創価学会からも竹入訪中に反対する圧力があつた。竹入の後年の回顧によれば、ある幹部から「何も田中首相を助ける

ために行くことはない。破門されるぞ」とまで言われたという。それを押し切った訪中であつただけに、竹入は、「手ぶらで帰れば、後ろから鉄砲で撃たれかねなかつた」と回顧するほど厳しい状況に置かれていた（石井明他編『記録と考証 日中国交正常化・日中平和友好条約締結交渉』岩波書店、二〇〇三年）。

結局、日本政府の共同声明案を入手できなかった竹入は、そのことを伏せたまま、持参した共同声明私案（竹入私案）を基に、周恩来との会談に入らねばならなかつた。七月二七日の第一回会談で、「（あなたは）田中首相の伝言をもつて来ているのです」と発言する周の前に、竹入は持参した共同声明案が私案であると言い出せず、そのまま私案に基づいて日本側の考えを説明した。そして、九月下旬の田中訪中の段取りまで踏み込んで協議したのである。田中政権の支持なしに行われた竹入の交渉は、後から見れば、かなりきわどいものであつた。

「必然」ではなかつた「竹入メモ」

しかし、竹入の独断専行は、結果的に日中国交正常化への扉を押し開いた。周恩来は、「竹入私案」と竹入との会談を基に、中国側共同声明案を起草し、毛沢東の裁可を得

た上で、二九日の第三回会談で竹入に示したのである。それは共同声明に盛り込む八項目と、台湾に関する「黙約事項」三項目からなるものであつた。中国側は、日中交渉で困難が予想された台湾問題や安保問題に関わる点に関して、中国側が柔軟姿勢を示すことを示唆し、さらに戦争賠償の請求を公式に放棄することを明らかにしたのである。

周恩来は、竹入に共同声明案を文面で渡さず、その場で読み上げ、竹入に全て記録させた。さらに竹入は、全三回の会談記録を中国側通訳と「念入りに摺り合わせながら取りまとめた」という（前掲『記録と考証』）。

帰国した竹入は八月四日午前、首相官邸で田中と面会した。この日、竹入は、中国案の項目を示した草案のみを提示した。田中は草案を読み始めたが、遅れてきた大平外相が、田中から草案を取り上げ、読み上げた後に、竹入に丁寧に礼を述べ、草案を手に部屋から飛び出していったという。翌日、竹入は再び田中と会見する。この日、竹入は三回分の会談記録を持参した。田中は、時間をかけて記録を読み終えた後、竹入に、「いままでいろいろな情報がきたが、どれもこれも根拠がはっきりしなかつた。判断する材料にならなかつた。こういうふう書いてくれればわかるんだ。行くよ。大したもんだな、周恩来という人物は」と、つい

に訪中の決意を語ったのである（柳田邦男『日本は燃えているか』、講談社、一九八三年）。

この田中の決断はよく知られた逸話であるが、同時に注目すべきは、竹入が持参した会谈記録が、極秘裡に日中交渉の準備を行っていた外務省事務当局に、初めて国交正常化の実現に向けた明確な見通しを与えた点である。外務省は「竹入メモ」によって初めて、中国側が日台実務関係や日米安保体制については異議を唱えず、さらに対日賠償を放棄する方針であることを確信したのである。実際、外務省で対中交渉の準備にあたっていた栗山尚一条約課長は、「中国側が何を考えているかということを知る上で、一番信頼できるものについていうのは、竹入さんのメモしかなかった。竹入さんのメモを見て私たちは、「中略」中国側が真剣に日本と正常化をしたいと思っていると分かった」と回顧している（栗山尚一『外交証言録 沖繩返還・日中国交正常化・日米「密約」』岩波書店、二〇一〇年）。

大平外相に率いられた外務省は、「竹入メモ」でもたらされた中国案を基に、本格的に国交正常化交渉に向けた準備を加速することになる。日中国交正常化が実現したのは、竹入・周会谈から二ヶ月後の一九七二年九月二九日のことであつた。

歴史の舞台は必然と偶然が重なりあつて進展し、その帰

結に正確な見通しを与えることは容易ではない。予期せぬ^{アクター}演者が、時に舞台で役割を演じることもあれば、逆に不本意に舞台を下りねばならない演者もある。中国側が既に国交正常化の早期実現の決意を固めていた以上、竹入訪中がなくとも、日本側にその意図が伝わるのは時間の問題であつたのかもしれない。しかし、中国側の誤解と竹入の独断といういくつかの偶然の交錯によって「竹入メモ」は、日中関係の歴史にその名を刻むことになつたのである。

なお、日中国交正常化の交渉記録や「竹入メモ」は、現在外務省外交史料館で原文書の複写を閲覧できるほか、石井明・朱建栄・添谷芳秀・林暁光『記録と考証 日中国交正常化・日中平和友好条約締結交渉』（岩波書店、二〇〇三年）や、ウェブサイトで「データベース」「世界と日本」(<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/~worldjpn/>)でも確認可能である。

い の う え ま さ や

一九七九年生まれ。神戸大学大学院法学研究科博士後期課程修了。博士（政治学）。米ベンシルバニア大学訪問研究員、神戸大学大学院法学研究科専任講師などを経て二〇一〇年より現職。著書に「日中国交正常化の政治史」がある。